

平成27年度（2015年度）セタシジミ種苗放流結果と生息状況

磯田能年・石崎大介

1. 目的

南湖はかつてセタシジミ漁業が盛んであったが、砂地の減少や水草の繁茂などにより現在ではほとんどセタシジミ漁業が行われていない。そこで、県では湖底耕耘や覆砂による漁場の再生を行っており、あわせてセタシジミの仔稚貝の種苗放流を実施している。その放流効果を検証するため生息状況を調査した。

2. 方法

橋本・井戸本（1996）の方法にしたがい、琵琶湖北湖で採捕した親貝を用いて、D型仔貝を生産し、それを用いて久米（2009）の方法に従い殻長約300 μ mまで育成した。生産個体は2015年7月10日から10月5日に順次、船上からホースと鉄管を用いてH26年度覆砂区（5.5ha）（図1）の水深約3mに放流した。なおD型仔貝は、2009年は耕耘区に約10億個体、H20年度覆砂区に約1億個体、2010年は耕耘区に約10.1億個体、H21年度覆砂区に約1億個体、2011年は耕耘区に10.3億個体、H22覆砂区に1.1億個体、2012年はH23覆砂区2.9億個体を放流した。育成稚貝は、2012年はH23覆砂区に616万個体、2013年はH24覆砂区に946万個体、2014年はH25覆砂区に

1,181万個体を放流した。また南北各耕耘区には2006年から2008年までD型仔貝の放流が行われている。

南北耕耘区の3地点、H20～H26年度覆砂区、南北耕耘区の中間の耕耘区外において2015年3月22日にエクマンバージ採泥器により稚貝の生息状況を調査した。また、上記調査地点に北耕耘区の北側（北外）、南耕耘区南側の耕耘区外（南外）を加えた地点において、3月23日に噴流式小型定量桁網（以下：桁網）により18mm以上のシジミの生息状況を調査した。エクマンバージで採捕（各点3回）した個体は目合い2,000、1,000、710 μ mの篩にかけた後、底質から選別して計数し、桁網で採捕した個体は殻長を計測して生息密度を求めた。

3. 結果

2015年度は殻長約300 μ m育成稚貝を平成26年度覆砂区に1,190万個体放流した。

エクマンバージによる調査結果を図2に示す。2014年度の調査と比較すると、全体的に生息密度が減少していた（図3）。2015年度は南湖において前年度に引き続き水草が多量に繁茂しており、稚貝の生息環境が悪化してい

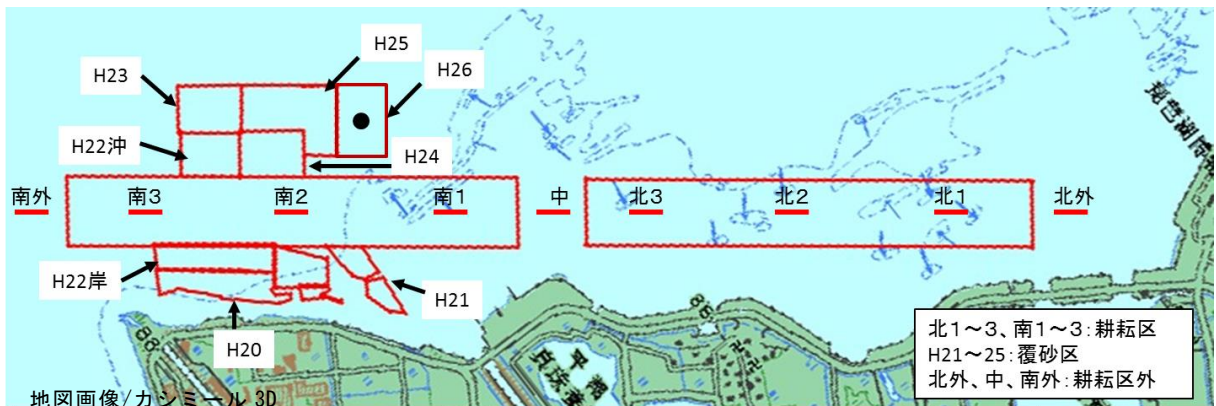


図1 セタシジミの種苗放流地点（●は今年度の放流地点）および調査地点

引用文献：橋本・井戸本（1996）滋賀県水産試験場研究報告 第45号
久米（2009）平成21年度滋賀県水産試験場事業報告

た可能性がある。今後は、水草の繁茂状況とシジミ仔稚貝の発生状況の関係を明らかにする必要はある。

桁網による調査では全体的に採捕量が減少しており、昨年度までは南耕耘区の中中部（南2）から南部（南3）において高い密度で18mm以上のシジミが生息していたが、今年度は採捕されなかった（図4）。稚貝は発生していること、並びに2015年度は水草が秋以降も枯死せず、調査時点においても大量に繁茂していたことから、桁網が湖底に到達していなかった可能性が考えられる。今後、正確な現存量の推定のためには手法の再検討が必要である。

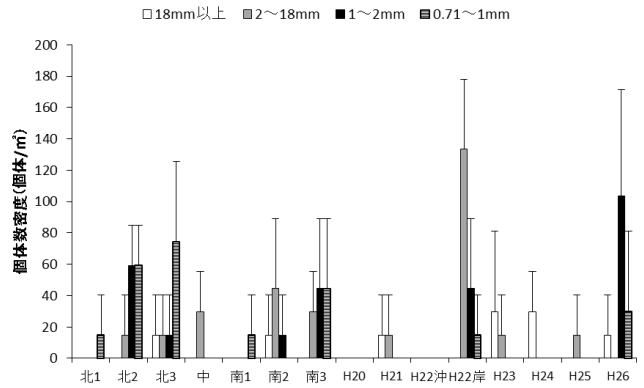


図2 シジミ稚貝の生息密度

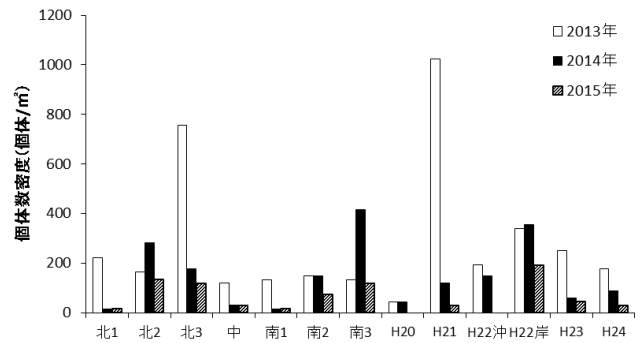


図3 シジミ稚貝の総生息密度の推移

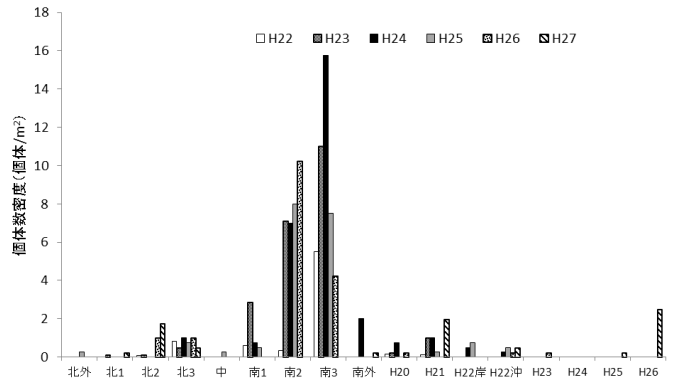


図4 18mm以上のシジミの生息密度